

「神の国」と「地の国」

— アウグスティヌスの『神の国』について —

村 川 満

アウグスティヌス Aurelius Augustinus (354～430) が、過去のヨーロッパの思想形成に果たした大きな役割については、誰も異論のないところであろう。しかし、今や世界史は大きな曲り角に来ており、過去の世界の中心であったヨーロッパ文明そのものが、その存立を問われている。そのような時にあって、アウグスティヌスは、もはや過去の人として、歴史的意味以上のものを現代にもち得ないのであろうか。

しかし、偉大な思想家はいつも、時代を超えて現代に語りかけてくるものをもっている。しかもそれは、彼がその時代の問題を身をもって荷ない、時代を徹底的に生き抜くことを通してである。その意味で、古代世界が没落し、中世へ移りゆくあの大きな歴史の転換期に生きて、その時代の激動を身をもって経験し、時代の問題を最も深くとらえ、それと格闘することによって自己を形成し、それを通じて歴史の形成者となったアウグスティヌスは、同じく大きな転換期に生きて、新しい方向を模索しつつあるわれわれに、時代を超えて訴え、示唆する多くのものを持っているのである。

アウグスティヌスの数多い著作の中でも、そのような意味でのアウグスティヌスを最も典型的に示すのが『神の国』*De civitate Dei*¹⁾である。この書はその題名 *De civitate Dei contra paganos* (異教徒を論駁して神の国を論ずる) が示しているように、彼が遭遇した具体的事件に関連して、キリスト教の真理を弁証した書であって、その意味では最も典型的な「時事の書」でありながら、問題を深い洞察と広い視野と大きいスケールで扱うことによって、単なる「時事の書」

の範囲をはるかに超えて、後の時代にはかり知れない影響を及ぼし、今も永遠的な意義を荷なつてわれわれの前におかれているのである。

I

さて、『神の国』の執筆の事情については、彼自身がその『再論』²⁾の中で次のように述べている。

その間に、ローマはアラリックの率いるゴート族の侵入と、そのもたらした大災害によって破壊されたが、われわれが異教徒 (*pagani*) と呼びならわしている、偽りの多数の神々の崇拜者達は、この破壊をキリスト教のせいにならうとして、今迄にもまして激しく、鋭く、真の神を冒瀆しはじめた。そこでわたしは、神の家をおもう熱心に燃え立って、彼らの冒瀆と誤謬とを論駁するために、『神の国』という書物を書くことにしたのである。

このような異教徒のキリスト教非難は、この時にはじまったものではなく、コンスタンティヌス大帝がキリスト教をローマ帝国公認の宗教として以来、異教の側の反発は激しく、ローマを興し、育て、守って来た伝統の神々をすてて、キリスト教を採用することは、神々への忘恩であって、それは天罰をもって報いられるとして、国内のさまざまな災いの原因をそこに求め、折りあるごとに、キリスト教に攻撃を加えて来たのであった。そしてこれに反撃するキリスト教徒との間に、はげしい論戦が繰り返されてきたのである。しかしここで注目すべきは、この両者の争いにおいて、政治的・社会的勢力としては、異教の側が敗退し、キリスト教の側が勝利をえるが、そのことは思想的に異教が克服されたことを意味してはいなかった、ということである。³⁾ というのは、キリ

1) *De civ. Dei* のテキストは *Corpus Christianorum, Series Latina, XLVII, XLVIII* (Turnhout: Brepols, 1955) におさめられている Dombart-Kalb 校訂本を用いる。

その他の作品については、*Sancti Aurelii Augustini Opera Omnia, opera et studio Monachorum Ordinis S. Benedicti e Congregatione S. Mauri* (Paris, 1679—1700) を原則として用いる。

2) *Retractationes*, II, LXIX. 上記 *Corpus Christianorum, SL, XLVII, I*

3) 内田芳明『アウグスティヌスと古代の終末』(弘文堂, 昭和36年) 78頁参照。この節全体の叙述は本書に負うところが多い。

スト教を攻撃する異教の根底にある考えは、国家の繁栄をその国の宗教と直結させる「国家宗教」の立場であるが、これに対するキリスト教の側の反撃も、結局伝統的なローマの神々の位置にキリスト教の神をおいただけで、キリスト教とその真の神こそ国家の繁栄と進歩の保護者だという立場であって、思想的には異教の立場を超えるものではなかったのである。

しかし、410年のアラリックによるローマ侵略という事件は、このようなキリスト教の立場を根底からゆるがし、異教の側に攻撃の絶好の理由を与えるものであった。

800年間不可侵を誇り、神聖な都、永遠の都と考えられていたローマが、蛮族によって踏みにじられたということは、異教徒たとキリスト教徒たとを問わず、当時の人々にとっては、世の終末の到来を思わせるほどの驚がくであった。異教徒がこれを古い神々の天罰のあらわれて解して、攻撃の新たな火の手をあげたのは当然のことであった。そしてこれに対してキリスト教徒は非常に困難な立場に立たされることになった。というのは、国家の繁栄とキリスト教とが直結して考えられており、「ローマの平和」(pax Romana) と「キリスト教の平和」(pax Christiana) とが一つに重なって受けとられていた当時のキリスト教徒にとって、帝国の没落を暗示するこの事件が、キリスト教帝国のもとで起こったということは、その立場を根底から脅かされるものであった。

このような状況の中でもなお、この災いを災いと考えず、過去の災いと比べると、現代のそれの方がはるかに軽く、耐え易いとするオロシウス Orosius のような見方もあった。

しかし、アウグスティヌスのこの事件に対する対応の仕方は全く異なっていた。彼は、オロシウスのような現実回避の楽天的見方、希望的観測をすることなく、災いを災いとして認め、直視するリアリズムの態度をとる。しかしそのリアリズムは、同時に、その歴史的事象の意義を超越的の下で見るといふ、高次のリアリズムであった。

つまり、アウグスティヌスは一方で、今キリスト教帝国のもとで起こっている災いをリアスティックにそのまま認めるが、それは決してキリス

ト教の責任ではなく、キリスト教より以前からすでに始まっていたローマの道徳的墮落の結果だという。他方、キリスト教を奉じていなかった古代ローマがなしとげた繁栄を十分評価するが、それはローマの神々の礼拝の故ではなく、古代ローマ人の道徳的卓越の故である、そして、古代ローマに繁栄を与えたのは、実に、ローマ人の知らなかった歴史の支配者なる真の神の摂理であり、今その同じ神がローマに災いを下しているのだと言う。ここにおいて、国家の繁栄と国家の宗教とを直結させる異教の立場は打破されて、ゴート族の侵入という一つの歴史的事象が、国家の枠を超えた歴史の支配者なる神の意志という観点から見られ、その災いが、この神の審判という意義を荷なうことになる。この歴史の支配者、審判者なる神という思想が、昔のヘブライの預言者達の歴史観であったことはいままでもないが、アウグスティヌスは今これを、時代の現実の中でとらえなおすのである。そしてこれは当時のローマ人一般には決定的に新しい思想であり、異教の立場はこれによって思想的に真に克服されるのである。

以上のべて来たことは、410年の事件後すぐになされたアウグスティヌスの一連の説教や、友人の質問に答えた書簡などに、はっきり打ち出されている立場であるが、これを更に大規模な形で展開したのが『神の国』であった。つまり、アウグスティヌスは410年の事件をめぐる問題を、ただ一つの時事問題としてではなく、永遠的意義をもった問題の一つのあらわれとして、すなわち、人類史を貫く人間界の悪とそれに対する神の救済のわざという大問題にかかわるものとして、それにふさわしい大規模な扱いを必要とすると考えたのである。

このようにして『神の国』は22巻の大著となり、前半の10巻において異教徒の主張に対する反駁がなされ、後半の12巻において、著者の立場の積極的主張の提示として、「神の国」(civitas Dei) と「地の国」(civitas terrena) という2つのcivitasの起源 (exortus) (XI—XIV) と、成長あるいは発展 (excursus, procursus) (XV—XVIII) と、それぞれに定められた終局 (debiti fines) (XIX—XXII) とが叙述されるという形で、人類史全体を包括す

る雄大な構想をもったものになるのである。⁴⁾

ところでこの「神の国」と「地の国」という概念は『神の国』の後半だけでなく、全体を通じての主題であるから、⁵⁾ われわれは、この2つの概念についてしらべることによって、複雑多岐にわたるこの書の正しい理解への手がかりをえたいと思う。

II

まず *civitas* という語そのものが、日本語にもヨーロッパの近代語にも、そのまま移せない多義的な意味内容をもった語である。およそ4つの意味が区別できるであろう。⁶⁾ (a)市民 (*cives*) の集団、集合的に見た市民。(b)市民が住んでいる町あるいは地域。(c)共同体、国家、政治的結合の単位。(d)市民の身分、市民権。

その上、この語には、ギリシャ・ローマの古典時代からアウグスティヌスの時代にいたる1,000年以上の歴史的発展の中で、それに結びついて来た、政治的・社会的・文化的・宗教的な意味内容があつて、それはアウグスティヌスの *civitas* 説の由来の問題とも結びついて、それだけで非常に大きい問題なので、今はアウグスティヌスが *civitas Dei*, *civitas terrena* と言った時の用語法だけに問題を限って考えることにしたい。

さて、アウグスティヌスは *civitas* という語でどういう内容を考えていたのであろうか。『神の国』の中に次のような言葉がある。

civitas とは、ある集団の絆で結び合わされた多数の人間にほかならない。⁷⁾

ここでは *civitas* が(a)それを構成する成員と(b)その集団を形成する結合原理という2面から考えられている。

それでは、*civitas Dei*と *civitas terrena* にこの規定はどのようにあてはまるのであろうか。アウグスティヌスの説明を聞いてみよう。

人類をわれわれは2つの種類 (*genus*) にわけける。一方は神に従って生きる (*secundum Deum vivere*) 人々から成り、もう一方は人間に従って生きる (*secundum hominem vivere*) 人々から成る。これをわれわれは神秘的な言い方で (*mystice*) 2つの *civitas* ——人間の2つの集団 (*societas*) ——と呼ぶ。一方は神とともに永遠に支配するように定められており (*praedestinata est*)、もう一方は悪魔とともに永遠の刑罰をうけるように定められている。⁸⁾

地上には、異なった儀式や風習によって生き、言語・武器・衣服のさまざまな相異によって区別される、極めて多くの大きな民族があるけれども、人間の社会 (集団) (*societas*) は2つしか存在していないのだ。それをわれわれは聖書に従って正当に2つの *civitas* と呼ぶことができるだろう。その一方は肉に従って生きる (*secundum carnem vivere*) 人々より成り、もう一方は霊に従って生きる (*secundum spiritum vivere*) 人々より成る。⁹⁾

これによってみると、*civitas Dei*, *civitas terrena* は人類を2分する概念で、人類の、神に従って生きる人の全体が *civitas Dei* であり、人間に従って生きる人の全体が *civitas terrena* と呼ばれるのであるから、先の *civitas* の規定の第1の面、すなわち「多数の人間」 (*hominum multitudo*) という点は最も大きい形で満たされていることになる。

次に第2の面である *civitas* の形成原理、絆 (*vinculum*) という点について見ると、上の引用文だけでは、*civitas Dei*, *civitas terrena* というのは、ただ人類を2つの型に従って分類したものにすぎないように見える。その意味では、この2つの *civitas* というのは、単なる理念的存在で、*civitas* という言葉は比喩的に用いられているだけのように思われるかもしれない。しかしアウグスティヌスは別のところで次のように言っている。

二つの愛が二つの国をつくった。すなわち、神をないがしろにしてまでも自己を愛する愛が地の国をつくり、自己をないがしろにしてまでも神を愛する愛が天の国をつくったのである。¹⁰⁾

4) *Retractationes*, *loc. cit.* 但しここでは *civitas terrena* のかわりに *civitas mundi* (この世の国) という語が用いられている。

5) *Ibid.* 「22巻全体がこの2つの国について書かれたのであるが、2つのうちのよい方から表題をとって『神の国』と呼ばれているのである」

6) R. H. Barrow, *Introduction to St. Augustine, The City of God* (London: Faber, 1950), pp. 20—21.

7) *De civ. Dei*, XV, 8. “*civitas, quae nihil est aliud quam hominum multitudo aliquo societatis vinculo conligata.*”

8) *Ibid.*, XV, 1.

9) *Ibid.*, XIV, 1. *secundum carnem* は上の *secundum hominem* と、*secundum spiritum* は *secundum Deum* と同じである。

10) *Ibid.*, XIV, 28. “*Fecerunt civitates duas amores duo, terrenam scilicet amor sui usque ad contemptum Dei, caelestem vero amor Dei usque ad contemptum sui.*”

前述の神に従って生きる人々とは、神を愛し、神において隣人を愛する人々であり、人間に従って生きる人々とは、神をないがしろにして自己を愛する人々である。ところで、アウグスティヌスによれば、愛 (amor) とは人間を最も根本において動かしている原理であり、同時に人と人とを結びつけて共同体をつくる原理である。このことを彼は劇場における観客を例にして説明している。¹¹⁾ すなわち、劇場において人がある特定の俳優を愛している場合、彼は同じようにその俳優を愛している他の人々をも、彼らが共通に愛しているその俳優の故に、愛する。このようにして、同一の対象を愛するものは、その愛によって一つに結合されるのである。それ故、神に従って生きる人々は神への愛 (amor Dei) によって現実一つに結びつけられており、人間に従って生きる人々は自己愛 (amor sui) によって、現実一つに結びつけられているのであって、それぞれが amor を vinculum として、現実 civitas を形成しているといえるのである。¹²⁾

それにしても、このような人類を二分する大集団に civitas という語を用いるのは普通ではない。そこでアウグスティヌスは「神秘的な言い方で2つの civitas と呼ぶ」(mystice appellamus) と言っており、また civitas を societas という語でおきかえてもいる。この mystice というのは単に metaphorical という意味ではないだろう。次の引用文で、「聖書に従って……呼ぶ」(secundum scripturas nostras appellare) という表現を使っているところからみると、これは聖書の用語の採用であり、聖書からのみその意味が明らかになる用語法だという意味をこめて mystice と言っているのだと思われる。もちろん聖書の中に civitas terrena という用語は見出せないし、聖書の civitas Dei は終末論的用語であるのに対して¹³⁾、アウグスティヌスのそれは終末論の意味をもちつつ、社会学的色彩が強いというような相

違がすぐに見出されるが、アウグスティヌスがこの用語を聖書から引き出したと主張していることは見のがされてはならない重要な点である。

III

ところで、このように amor Dei と amor sui とによって人類は二分されるのであるが、この区分は、むしろ人間世界の成立に先立って、超人間的世界、つまり天使の世界においてまず成立したとアウグスティヌスは考える。そして amor は人間と人間とを結びつけるだけでなく、人間と天使の間をも結びつけるので、civitas Dei と civitas terrena とはその中にそれぞれ天使と人間とを含んだ、人間界と超人間界とを貫いて成立している大集団だということになる。

従って、人間と天使とについてそれぞれ2つずつの4つの civitas があるのではなく、むしろ2つの civitas があると言うのが正しい。すなわち一方は善き天使達と善き人間達とから成り立つものであり、他方は悪き天使達と悪き人間達とから成り立つものである。^{13')}

そして civitas Dei の頭はキリストであり、civitas terrena の頭は悪魔であるから、civitas Dei は civitas Christi (キリストの国)、civitas terrena は civitas diaboli (悪魔の国) とも呼ばれている。¹⁴⁾

この用語が暗示しているように、civitas Dei と civitas terrena は、倫理的、宗教的に全く相反した原理の上に立つ、対立した存在である。しかし人間は誰も悪魔ではないし、またキリストでもない。現実の人間の世界は、善と悪、信と不信という対立が完全な形で存在している世界ではない。そういう世界があるとすれば、それこそ天使の世界と悪魔の世界である。したがって、civitas Dei と civitas terrena とが明確に分離され、完全に対立しているのは、それぞれの civitas の天使の部分においてだけであって、人間の世界においては2つの civitas は混交しているとアウグスティ

11) *De doctrina Christiana*, I, 30.

12) しかし、2つの civitas それぞれの結合のしかたは同じではない。civitas Dei においては、その愛はひとりの永遠不変の神に向けられ、またその神において有限的なものが愛され、そこに平和と一致があるが、civitas terrena においては、その愛は多数の有限なものに分散され、地上のものが、それ自体のために追求されるので、争いは絶えず、平和と一致がない。cf. e.g. *De catechizandis rudibus*, XIX, 31.

13) たとえば新約聖書へブル書11:10, 16; 12:22; 13:14; 黙示録21:2等。^{13')} *De civ. Dei*, XII, 1.

14) *De civ. Dei*, XV, 20; XXII, 1; *Enchiridion*, XXIX, 111 など。

ヌスは言う。

この2つの *civitas* は、最後の審判によって分離されるまで、この世においては (*in hoc saeculo*) からまり合い、互いに混じり合っている。¹⁵⁾

この混交ということは、まず、この世という場所に2つの国の民が、別々に分離して存在しているのではなく、混じり合っているという事である。2つの *civitas* がそれぞれの *civitas* の形成原理である *amor* において分離されて存在しているという事実は変わらないのである。

2つの *civitas* は…いま身体的には混交しているが、意志においては分離している。しかし審判の日には、身体的にも分離されるのである。¹⁶⁾

しかし混交 (*permixtio*) というこの意味は、これに尽きないように思われる。アウグスティヌスは次のようなことを言っている。

この2つの *civitas* は、今のところは (*interim*) 混じり合っているが、終りの日には分離されるのである…そして現在におけるこの混交 (*permixtio temporalis*) のために、バビロンの都 (*civitas Babylonia*) に属する人が、エルサレムに属する事柄を管理したり、反対にエルサレムに属する人が、バビロンに属することを管理したりすることが起こるのである。¹⁷⁾

ここでは混交によって、単に場所的共存だけでなく、2つの *civitas* が、その働きにおいて、微妙にからまり合う点のあることが考えられている。

更にアウグスティヌスは、「(地上にある神の国は) その敵達の中にさえ、将来の民 (*cives futuri*) が隠れていることを覚えておかななくてはならない」と述べ、反対に、現在教会に連なっている者の中にも、最後的には神の国の民のうける祝福にあずからない者があると言って、ここに2つの *civitas* の混交を見ている。¹⁸⁾

ここでは、とくに現在と将来という時間の要素が混交ということにかかわってきている。そして

内的原理としての *amor, voluntas* のちがいでよって人類を二分するのが2つの *civitas* だという static な見方だけでは包みきれない面が、ここにあらわれているように思われる。つまり、現実の *amor, voluntas* という面から見れば、現在の神の国の敵はどこまでも敵であって、その限りでは神の国に属してはいない。にもかかわらずそれを将来の神の国の民とみなして、そこに2つの *civitas* の混交を考える視点は何かであろうか。同じ箇所、この「将来の民」が「(神の国の) 友となるよう 予定されている者」(*praedestinati amici*) と言いかえられているところからもわかるように、それは神の「予定」(*praedestinatio*) という視点である。この神の予定とそれにもとづく予知 (*praescientia*) についてアウグスティヌスは次のように書いている。

神は、世界の造られる前から、御子の姿に似るものとならせようと予定された (*praedestinaverit*) 者を知っておられる。この神の予知によれば、明らかに (*aperte*) 外にあり、異端 (*haeretici*) と呼ばれている人々の中に、多くの善い信者たちよりも、もっと善い人々が沢山いるのである。われわれは、今日のかれらを見るが、明日かれらがどんなものになるかは、知らないのである。¹⁹⁾

神のあの言い難い予知においては、外にあるように見える多くの者が中にあるのであり、中にあるように見える多くの者が外にあるのである。²⁰⁾

この神の予定という視点に立てば、*civitas Dei* とは、「過去、現在、未来にわたるすべての選ばれた者の団体」²¹⁾と規定できるだろう。これに対して、*civitas terrena* は「過去、現在、未来にわたるすべての棄てられた者 (*reprobati*) の団体」と規定できるだろう。

ところが、この規定と最初の規定とは必ずしもすぐには一致しない点がある。たとえば、神の予定という永遠の視点に立てば神の国の民である者

15) *De civ. Dei*, I, 35.

16) *De catech. rud.*, *loc. cit.* “*Daue civitates... nunc permixtae corporibus, sed voluntatibus separatae, in die vero iudicii etiam corpore separandae.*” ここで意志 *voluntas* というのは、愛 *amor* というのと同じである。

17) *Enarrationes in Psalmos*, LI, 8. ここで、バビロンとは *civitas terrena* を、エルサレムとは *civitas Dei* を指している。

18) *De civ. Dei* I, 35.

19) *De baptismo contra Donatistas*, IV, 4.

20) *Ibid.*, V, 38.

21) É. Gilson, *Introduction à l'étude de Saint Augustin* (Paris: Vrin, 1949), p. 238. “la société de tous les élus passés, présents ou futurs.”

でも、現実には神に従って生きていない者、神の国の敵である者は、最初の規定によれば神の国の民とは言えないのである。アウグスティヌスの *civitas* を理念的実在と考える誤りに対して十分に警戒するとともに、*civitas* 概念を static にとらえることも避けなければならない。もし static に考えるならば、現実の生き方からみられた現在の規定と、神の予定から見られた、いわば永遠の現在の規定とは、一致しない点が当然でくる。しかし、神の永遠は時間を包むものであり、神の永遠の予定は時間の中に実現されるものである。神は「予定されたことがらを時間のうちに実現される」²²⁾のである。したがって、神の予定のうちにある *civitas* は歴史の現実のなかでは、完全な形では実現していない。それが実現するのは終末においてであって、いまは完全な実現への過程にあるのである。しかし神の予定は歴史の過程をもその中に含んでいるのであるから、予定の中にある *civitas* と歴史の中にある *civitas* とは一つである。このようにアウグスティヌスの *civitas* 概念を、予定に基づけられ、歴史の中に実現されつつある現実を描く、歴史的概念として、dynamic にとらえなければならない。

IV

さて、このように地上にあって、歴史の過程の中を、*civitas terrena* と混交しつつ、歩んでいる *civitas Dei* の姿を、アウグスティヌスは *peregrinatio* (異国滞在) の状態として描いている。

神の国は、この時間の流れの中にあっては (in hoc temporum cursu)、不信仰な者たちの間を (inter impios) 信仰によって生きつつ、異国人として滞在する (*peregrinatur*)。²³⁾

聖なる神の国の民たちは、此の世に異国人として滞在するあいだ (in huius vitae peregrinatione)、神に従って生きる。²⁴⁾

何故ならば、彼らの故国は天にあるからであ

る。²⁵⁾これに対して *civitas terrena* のあり方は全く反対である。

地の国は、この世に異国人として滞在するのではなくて (non peregrinantem in hoc mundo)、この世の過ぎゆく平和と幸福を追い求める……。それはこの世に、みずからの目ざし、熱望する目的をもってしている。²⁶⁾

このようにアウグスティヌスは地上にある *civitas Dei* の状態を *peregrinatio* の状態と描いて、天にある *civitas* の恒常不変の幸福の状態と対比しているが、それは単にそのようないわば上下の比較を意図するものではなく、*civitas Dei* が完成へ向っての歴史的過程の中にあることを示すものである。*civitas Dei* の民は地上にあって寄留者 (*peregrini*) であるだけでなく、旅人 (*viatores*) なのである。しかもこの *peregrinatio* の期間は、単に未完成、不完全という消極的な意味だけでなく、神の国の民が生まれ出され²⁷⁾ 呼び集められる期間であるという、神の国の完成のために不可欠な期間としての積極的な意義を荷なっている。

天的な国 (*caelestis civitas*) は、地上に寄留している (*peregrinatur*) あいだ、すべての国々からその民を呼び出し、あらゆる言語をもった寄留者の団体 (*peregrina societas*) に結び合わせる。²⁸⁾

この *cives* の召集はどのようにしてなされるのか。——福音の宣教によってである。

この *civitas* はいま建てられている。山から石が宣教師の手によって切り出され、永遠の建物の中に組み入れられるべく四角に切られるのである。しかしなお多くの石が建築者 (*artifex*) の手のうちにある。²⁹⁾

しかしながらこの宣教の働きも、神の恩寵が聖霊によって内的に人間の心に働きかけるのでなければ無効である。神はその選んだ者の心に働きかけ、彼を回心に導くことによって、彼を現実には *civitas Dei* の民とするのである。

聖霊が内的に働いて、外から与えられる薬が効くようにされるのである……。もしも神が内的恩寵によって精神を支配し、動かされるのでなければ、真理の宣教はすべて全く無益である。³⁰⁾

22) *Confessiones*, XIII, 34, 49. "praedestinata temporaliter exequi."

23) *De civ. Dei*, praefatio.

24) *Ibid.*, XIV, 9.

25) *Ibid.*, XV, 1. "Superna est enim sanctorum civitas."

26) *Ibid.*, XV, 17.

27) *Ibid.*, XV, 1. "sanctorum civitas, quamvis hic pariat cives,...."

28) *Ibid.*, XIX, 17.

29) *Enar. in Ps.*, CXXI, 4.

30) *De civ. Dei*, XV, 6.

それ故、civitas Dei を建てるわざは神の恩寵のわざにほかならない。従って、先に「2つの愛が2つの国をつくった」と言われたが、この2つの愛は同一平面で考えることはできない。何故なら、「Amor Sui は常に人間に開いている可能性である。しかし Amor Dei はそうではない。天使達が神に寄りすがることができると、神の助けを始めから必要としたように、人間は樂園の罪なき状態においても、神の助けなしには正しく生きることが出来なかったのである。……この神の助けというのは、聖霊によってわれわれの心に注がれた神の愛の恩寵と定義すれば、もつと十分である。人間は Amor Dei によって、神に向かい神に寄りすがり、神に従い、神を最高善として楽しむのであるが、その Amor Dei は、神の命令であるに劣らず、神の賜物なのである。」³¹⁾まして、いまアダムの罪によって滅びの中にあり、罪に定められた塊 (massa damnata) である人間は、神の恩寵によって滅びから救い出され、再生せしめられるのでなければ、amor Dei への可能性は開かれない。³²⁾それ故 civitas Dei は、等しく罪に定められた全人類の中から、神がある者を選び、福音の宣教を通して召し、恩寵によって再生せしめることによって建てられる、また建てられつつある civitas なのである。アウグスティヌスが civitas Dei の民の姿を描いている次の美しい叙述は、このことをわれわれに強く印象づけるものであろう。

この世においては寄留者であり、神の国に属する者、めぐみによって予定され、めぐみによって選ばれ、めぐみによって地上では寄留者、めぐみによって上なる国の市民である者³³⁾。

この意味でアウグスティヌスが、神またキリストを civitas Dei の創設者 (conditor) 形成者

(fabricator) と呼んでいることは、決して軽く見られてはならないことである。³⁴⁾

V

さて、以上みてきたような civitas Dei の積極的叙述に対して、civitas terrena の規定は消極的性格が強いように思われる。

civitas Dei は神のめぐみのわざによって建てられてゆく civitas で、歴史の過程の中でその民を呼び集めつつ、完成目指して進むといわれるが、civitas terrena は定められた終局に向かうことが言われるのみである。

又 civitas としての社会結合の面から見ても、civitas Dei は、神を愛し、神において互いに愛し合うという平和と一致の社会であるのに対して、civitas terrena の方は、amor sui という共通なものに結ばれているとはいえ、統一と一致がなく、内部的に争いが絶えないという自己否定的要因を内にもった社会である。³⁵⁾従って2つの civitas が、歴史の過程を終えて終末に達する時、civitas Dei は愛の共同体として完成されるが、civitas terrena はもはや civitas ではなくなるのである。³⁶⁾それ故 civitas Dei は「不滅の国」(civitas immortalis) とよばれるのに対して、civitas terrena は「滅ぶべき国」(civitas mortalis) とよばれるのである。

このような civitas terrena の消極的規定は、アウグスティヌスがマニ教のように、善と悪を形而上的に対立する2つの原理と考えないところからくる当然の帰結であらう。

アウグスティヌスは civitas terrena を「この世の事物においてあるもの」、civitas Dei を「神に対する望みにおいてあるもの」と対比している

31) J. H. S. Burleigh, *The City of God, a Study of St. Augustine's Philosophy* (London: Nisbet, 1949), p. 130.

32) *De civ. Dei*, XV, 1.

33) *Ibid.* "peregrinus in saeculo et pertinens ad civitatem Dei, gratia praedestinitus gratia electus, gratia peregrinus deorsum gratia civis sursum."

34) アウグスティヌスは聖書の歴史からカインを civitas terrena の conditor と語る (XV. 5, 17) が、それに対応するアベルをも、またセツをも civitas Dei の conditor とよんでいないことに注意すべきである。

35) 山中良知『宗教と社会倫理』(国際日本研究所, 昭和45年) 76頁参照。「一つは、神を愛する愛は、隣人との共同を成立せしめ、かつ隣人愛へと成長発展する増大性を持ち、他は、地上のもの愛し、自己中心的であるために、その愛は自己破滅の原因となる。」

36) *De civ. Dei*, XV, 4. 「地の国は永遠のものではないだろう。というのは、最後の審判をうけると、それはもはや civitas ではないだろう。」

が、³⁷⁾ *civitas Dei* もこの世に住みこの世の事物を用いるのであるから、*civitas terrena* がそれにおいてある「この世の事物」は、決してそれ自体悪なのではなく、善である。従って、

地の国は…地上ではそれ自身の善をもっており、それに与ることをよるこんでいる。…これらのものは善であり、疑いもなく神の賜物である。³⁸⁾

このように見てくると、*civitas Dei* と *civitas terrena* とは、「キリストの国」と「悪魔の国」、「善き者の国」(*civitas bonorum*) と「悪しき者の国」(*civitas malorum*) といわれているように原理的に対立しているが、その関係は単純な相反関係でも敵対関係でもないことがわかる。³⁹⁾

(地上にある神の国) はすでに曠いの約束を与えられており、聖霊の賜物をいわば担保としてうけているのであるから、地上の消滅的生の維持に適した事柄を管理する地の国の法には従うことをためらわない。このようにして、この可滅性は共通のものであるから、それにかかわる事柄においては、2つの国の間に一致(*concordia*) が保たれるのである。⁴⁰⁾

それ故、*civitas terrena* は *civitas Dei* に単純に対立するのではなく、対立しつつも、*civitas Dei* が歴史の過程を歩む間、それをうけ入れ⁴¹⁾、その地上での歩みに必要な条件をととのえるところで *civitas Dei* に仕えるのである。

地上の生の間、さしあたり地上の平和をもつということは、われわれにも大切である。何故なら、2つの国が混じり合っている間、われわれもまたバビロンの平和を用いるのであるから。⁴²⁾

しかしこのように言うてくることは、決して2つの *civitas* の対立関係を否定したり、あいまいにするものではない。

この2種の人間と2種の家(= *civitas*) は、地上の消滅的生に必要な事物を用いることにおいては、共通である。けれども、それぞれがそれを用いる目的はそれぞれに特有のもので (*proprius*)、大いに異なってい

る。⁴³⁾

地上の事物の使用は、地の国においては、すべて地上の平和を楽しむことに関係づけられるが、神の国においては、永遠の平和を楽しむことに関係づけられるのである。⁴⁴⁾

その上両者に定められている終局(*debiti fines*) が全く違っているのであって、これは決定的な相違である。しかし2つの *civitas* の対立は *metaphysical* あるいは *ontological* な対立ではなく、どこまでも *ethical* な対立である。存在論的にはすべてのものが、神の被造物である限り、善である。しかしその善なるものを正しく用いないところに悪がある。従って *civitas terrena* も神に造られた人間より成るのであり、その限りにおいては善をもっており、それが用いる地上のものも善である。しかし

地の国は、始めも終りもともに地的であって、この世において認識されるもの以上を全く望まない。⁴⁵⁾

そしてこれはこの世の事物の悪しき用い方であって、地上の事物を

誤った仕方で (*perperam*) 用いる者は、不滅の平和を決してうけないし、地上的なよきものをも失うであろう。⁴⁶⁾

このように見てくると、アウグスティヌスが2つの *civitas* を、一方で全く対立したものとするとともに、他方では *civitas terrena* に相対的な善を認め、両者に一致する点のあることを述べているのは、決して不整合なことではない。この2つの *civitas* の概念を抽象的に構想された *static* な概念としてとらえるならば、多くの不整合が感じられるかもしれない。しかし、これを *dynamic* な歴史的概念としてとらえるならば、それが、神の啓示に深く根ざしつつ、歴史の現実の中に力強くなされつつある神の救済のわざを深く洞察する

37) *Ibid.*, XV, 21. “una in re huius saeculi, altera in spe Dei.”

38) *Ibid.*, XV, 4.

39) たとえば Ernest Barker の次の言葉を参照。“The earthly city... is an ideal conception, or rather, and to speak more exactly, it may be called the ideal negation, or antithesis, of the ideal.” *Introduction to the City of God*, tr. by John Healey (Everyman's Library), 1945, p. xviii. こういう説明は正しいとは思われない。

40) *De civ Dei.*, XIX, 17.

41) 山中良知, 前掲書 78頁。「地上の国は理念的には神の国と対立しながら、歴史的には、神の国の民が一時そこを通過点として経なければならない場所を示す。」

42) *De civ. Dei.*, XIX, 26.

43) *Ibid.*, XIX, 17.

44) *Ibid.*, XIX, 14.

45) *Ibid.*, XV, 17.

46) *Ibid.*, XIX, 13.

ことによって得られた現実的、具体的概念だということがわかるであろう。

さて、アウグスティヌスは、このように人類史全体を *civitas Dei* と *civitas terrena* の歴史としてとらえ、神に背く勢力のただ中に、神が救済のわざを力強く押し進めてゆかれる過程として歴史を解釈したが、その際、究局的意義をもつのはもちろん *civitas Dei* の方であるとしても、*civitas terrena* を単に神に敵対する勢力として描くのではなく、そこで *civitas Dei* が形成されてゆくところとして、更に *civitas Dei* が成立してゆくために不可欠な条件を備えるものとして、神の歴史を通じての救済の経論の中に積極的に位置づけたことは意義深いことである。もちろん、このよう

な歴史の解釈は多くの人にとって、あまりにも歴史の単純化であるとして受け入れられないものであるかもしれない。しかし、それが、歴史の中に統一の意味を見出そうとした真剣な試みだったことは誰も否定しないであろう。そして、アウグスティヌスが、この人間の織りなす錯綜した歴史の意味を、単に人間世界の内部に求めず、それを超えたところに求めようとした方向は、今もその意義を失わないものであるといわなければならない。

付記：*civitas Dei* と教会、*civitas terrena* と国家というような当然言及すべき問題も紙数の関係で扱うことができず、又 *civitas* 説には多くの批評的問題があるが、それらにも全くふれることができなかった。これらについては又別の機会に扱うことにしたい。